第十八回学術大会発表要旨

ゼノン『国家』の理論的位置

筑波大学大学院　上田　慎一

ゼノンがプラトンの同名著作に対抗して著した『国家』はストア派内部においてさえ偽作説や失敗作説まで含む多大な論争を古来引き起こしてきた。今日でも数としては多くはないが様々な側面から様々な議論がなされている。しかし、ゼノンさらにはストア派の理論全体との整合性を考慮しつつその中にこの著作を位置付けようとする試みは正面からはなされていないと思われる。そこで、この問題に何らかの寄与を果たそうとする次第である。

『国家』の現存断片のほとんどは神殿廃棄論、近親相姦や人肉食の許容などその過激な内容に関わっている。これらはゼノンが犬儒派から受け継いだ要素であり、徳の単独至高価値という古ストアの厳正主義の最極端な面を表す。他方、古ストア派が段階主義的かつ現実的な思想や教説をもっていたこともまた確かである。当然問題となるのは両方の側面の整合性、そして『国家』の位置である。

ストア派の体系の緊密さを尊重しできるかぎり理論的分裂に抗するとすれば、『国家』の思想内容をどのように理論全体に組み込むかという問題が生ずる。そこで『国家』そのものを「なかったことにする」、積極的な内容をはぎ取るといった消極的な方法は退け、『国家』に積極的な内容を盛り込みつつ、しかも残余の教説との整合を計る路線をそれでも採りたい。その上で、この路線を採ろうとする際に解消すべき問題点を考察する。それらが解消不能となれば差し当たり退けた立場を再検討せねばならない。

最大の問題は、理想国そのものの内容に関わる。それは劣者つまり（子供などまで含む）賢者以外の全ての人間の扱いである。市民つまり成員を厳密に賢者に限定するのは結婚・家族関係に関する証言との矛盾を引き起こし、またグロテスクな国家観につながるか、さもなくば『国家』の理想国はいわゆる国家ではないとせざるをえなくなる。「理想国」を何らかのいわゆる「国家」としつつ内部に劣者の存在を許すなら今度はその扱いが問題となるが、これについて証言は否定的なこと、つまり「あれをするな」「あれは不要」ということしか語らない。

しかし、証言の不在は必ずしもそれに関する思想の不在を意味しない。筆者の解決策は『国家』は、「優先」「向上」「忠告の価値」などの段階主義的教説まで含んだ形での、ストア派倫理学「全体」の体現としての理想国論であった、つまり『国家』を厳正主義的側面に押し込めるのは誤りだというものである。この解釈の利点は、現実的な問題に関するストア派の教説を次善的なものとする必要がなくなること、『国家』のような理想論を「ありえない事態の待望」と必ずしもせずともよくなることである。

※この発表は文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

キリスト教寺院のシンボリズムについて

文化女子大学　リアナ　トルファシュ

真の宗教儀礼が行なわれる場は何れも、根本的に聖なる芸術に基づくものである。その第一の特徴はシンボリズムである。即ち実在の諸段階を結びつける対応関係を、イメージ、比例などにより表現し、不可視界を可視界により表わし、人間をそこへと導く。

従って本来的な意見において考えるならばキリスト教会は、単に「信者が集まる場」ではなく、単なる大建造物でもない。それは真の意味での寺院である。即ちそれ自体が様々なシンボルの集合体であり、同時に教会典礼のシンボルを実現させる場である。寺院建築のシンボリズムはこの目的に沿ったものでなければならない。

他の宗教寺院におけると同様、キリスト教寺院には、密接に結ばれながらも区別される二種類のシンボルが認められる。即ち宇宙論的シンボルと神学的シンボルとである。前者は普遍的意味にかかわるものであり、後者はキリスト教に固有の神学的意味にかかわるものである。一方同一のシンボルが宇宙論的解釈と神学的解釈の両方により明らかにされることもある。

今回の発表では、キリスト教寺院建築の前提である固有の神学的意味を考慮しながら、何よりもその宇宙論的、従って普遍的意味を明らかにすることを目的とする。

宗教学によっても明かなように、聖なる寺院は何れも「天上の」原型並びに「世界」のイメージである。「世界」を表す場合には、「写実的」方法によるのではなく、建築的、最終的には幾何学的シンボリズムによって「世界」の存在論的「構造」を表わすのである。

キリスト教寺院は、黙示録の描く「天のエルサレム」を「天上の」原型とする、地上における反映である。一方、「世界」のイメージとして二つの基本的構造を持つ。一つは、平面的構造で、円、四角、東西南北を示す十字、更に加えて円の中心であり、十字の縦軸と横軸が交差する場（教会典礼にとり最重要な場）でもある「点」により構成される。いま一つは立体的構造で、球体、立方体、上記の「点」を支点とし寺院の頂点（即ち「世界の頂点」）を越えて伸びる垂直軸により構成される。これらのキリスト教寺院の建築に見られる根本的要素はシンボルに他ならず、それらの意味について語ることは、「天」、「地」、「方角」、「世界の中心」、「世界の軸」について語ることである。

今回の発表では、キリスト教建築に見られるシンボリズムが固有のものであるに留まらず、普遍的性格を持つことを示すことを試みる。

ゲームの問題—その哲学的意味

茨城工業高等専門学校　神山　和好

人間の合理的な意思決定行動を分析する諸理論を「決定科学」（Decision Science）と総称しますが、その中核を成す理論にゲーム理論（theory of games）があります。ゲーム理論とは「プレーヤー間の対立、交渉、協調に関する一般理論」であると言うこともできますし、また、「個人やグループ、国家間の相互交渉をゲームという観点から分析する数学的理論」であると特徴づけることもできます。

今日のゲーム理論の直接の出発点はフォン・ノイマン＝モルゲンシュテルンの大著『ゲームの理論と経済行動』（一九四四）でありますが、ゲーム理論の最近二〇年間の研究の発展は（生物進化論への応用等）著しいものがあります。ゲーム理論の発展とともに、その基礎をめぐり「ゲーム理論基礎論」（foundations of game theory）という研究領域が形成されています。これは科学哲学の新しい分野であります。

ゲーム理論基礎論上の問題を簡単のため「ゲームの問題」と呼ぶことにいたします。ゲームの問題は、それが比較的最近形成されたこともあり、言語や論理、数学、物理の問題と比べ哲学には馴染みが薄いと思われます。そこで、ここでは

A、ゲームの問題はどのようなタイプの問題であり

B、どのような観点から哲学的興味をひくか

という2点についてお話ししたいと思います。

Aについて：規則に関する哲学上の問題を

①、［ウィトゲンシュタイン以来の］規則遵守の問題（the problem of rule-following）：一般に規則に従うことは可能かと問うものと

②、規則の正当化の問題：［規則に従うこと自身は何らかの仕方で可能であるとしつつ］帰納法や演繹法等の推理規則や道徳上の規範などの特定の規則に従うことの正当化（基礎づけ、合理化）は可能かと問うもの

の2種類に整理した上で、

＊ナッシュ均衡解（Nash equilibrium）の正当化をはじめとするゲームの問題の中核部分は、後者すなわち、規則の正当化の問題の現代的な一つのヴァリエーションである。

ことを指摘します。

Bについて：［ことばの使用等の背景を成す］社会的文脈において成立する公共性をいかに分析するか、という問題が後期ウィトゲンシュタイン以来の重要な哲学的課題であることに注意しつつ、

＊１９７０年代以後ゲーム理論は、公共性の一つの現象（共有知識 common knowledge—プレーヤー間での知識や信念の相互的共有）に対し立ち入った分析を行ってきており、それは認識論の新しい領域の開拓という哲学的意義をもつ。

ことを指摘します。

記：本研究は文部省科学研究費補助金による研究である。

荀子思想の構成と体系について

筑波大学　佐藤　貢悦

本発表は、荀子思想の構成過程と、その論理体系とを構造的に闡明することを目的とする論考の一環である。周知のように、荀子思想に対しては、孔孟の伝統との関係ならびに、墨・道・名・法など諸子学からの影響が指摘されている。そして、『荀子』三十二編（筆者は、それが自然観―人間観―群・国家観を基本的な骨格としていると解釈する）が、文体や形式はさまざまで一時期に成書したとは看做しがたいものの、全体の思想内容としては、ほぼ完結した体系を有することは承認されよう。しかし、その体系は、基本的には孟子の論理体系の骨格をそのまま踏襲することによって構成されたものではなかろうか。ちなみに、荀子は「礼」の外在性を主張する。確かに、孔子における「礼」もまた「仁」を内実とする外的形式であったが、荀子の主張するところは、孔子思想に直結すべき内容ではなくして、むしろ孟子の「礼」が内面の徳（恭敬～辞譲の心＝礼の端）として、人に内在化されていることに対するアンチテーゼではなかろうか、というのが本発表での仮説である。そして、試みにこうした視点から荀子思想を理解するならば、その論理体系はきわめて単純な構造をもつものとみられる。と同時に、荀子思想の独自性・独創性という意義は、多分に捨象されることになろう。

そこで、天人観の基本構造をきわめて簡潔な図式によって示せば、両者の論理体系は、それぞれ以下のような論理体系を有していると考えられる。

〈孟子〉

心　―性―天（道徳律）
耳目―性―天（自然律）

↓

〈荀子〉

心・五官―性―天

荀子においても、修為の結果としては、人の本姓（「性」）は明らかに道徳性を担いうるとされている。無論、そのことは「性」のうちに何らの道徳的価値（要素）をもつことを意味しない。しかし、性に内在する「心」の機能を前提として、礼の存在もその意義をもちうることになる。というのも、「心」は一方で功利の側面をもち、他方では「五官」にはたらくという道徳性の側面とを、自己のおのずからなる機能として兼ね備えているからであり、かかる「心」の機能を発揮して礼の教えを導きとし「性」を化することは、荀子において、儒家的理念における理想的人格としての「聖人」に到達する階梯であった。

ここにおいて問題となるのが「聖人作礼」説である。すなわち、修為の到達点にあるべき聖人が、礼によらずしてみずからの性を化しえたのか、ひいては礼楽制度を制定できたのかは不明であり、聖人の存在が荀子の論理体系に先行していると考えざるをえないからである。かかる矛盾が生じた主要因は、荀子があくまで儒家的理念に固執し、孟子の天人観の論理体系を批判的にせよ結果として継承したことに由来すると考えられる。

※なお、小林秀樹会員の発表要旨は、論文と重複するため割愛する。